



佐久の先人たち④

佐久の生んだ大詩人
みつ いし かつ ご ろう
三石勝五郎
(1888~1976年)

「指庄の心 母ごころ
押せば生命の泉わく」

この旋律のよさは、まさに勝五郎の生涯そのものと言えるだろう。髭のおじいさんと呼ばれ、ふるさと佐久をこよなく愛し、また故郷の人々に心から愛された放浪の詩人であった。

●生れながらの詩人

三石勝五郎は、一八八八(明治21)年に南佐久郡青沼村入澤(現佐久市入澤)に、父三石倉蔵、母、その長男として生まれた。一二歳の時、弟妹二人を残し母は父と話し合いで別れたため、生れつき性格のいい勝五郎は、弟妹の面倒をみながらの少年時代を過ごす。

後妻としてきた母とうは、長男だけはしっかりと教育を身につけさせたいという思いが強く、もともと者西田天香との出会いは、勝五郎の生き方にさまざまに大きな影響を与えた。天香に従って秋田県の田ノ沢、小沢の鉱山、十和田湖などで働き、路上での托鉢、便所掃除など無償の奉仕活動をし、青森、北海道、樺太の海岸までも放浪行脚をしながら詩を書いた。そうした自然のままを読む詩は広く世間に認められていったが、詩を金銭にかえたくないと相変わらずの旅をつづけ、原っぱに遊ぶ子どもたちの中に入っているのは無邪気に遊びを共にする毎日だった。

●指庄の心 母ごころ

一九二五(大正14)年東洋大学哲学科で易経の講座を受講する。その二月には東京小石川伝通院前大黒天境内に住む「福門堂易断所」を開設し、運命判断など易占業をはじめた。

その頃売れない指庄師がいた。浪越徳治郎である。戦時中東京大空襲の折一人は壕の中で知り合う。易も親指でさばく、指庄も親指だと意気投合し、「(一)で『指庄の心母ごころ』押せば生命の泉わく(二)の指庄讃歌は浪越の設立した日本指庄学院の校歌となっている(三)と今でいう『コマーシャル』の縁でテレビ対談が実現する。一躍世に知られるが勝五郎は心おこるごとく肩からさげた頭陀袋に思いついた詩を書いては放りこんでいった。

利発だった勝五郎も、それに十分応える学校生活を送った。その反面、再婚して隣村に住む生母を慕う心もおさえがたく、母の暮らす集落の見える山土手に横たわっては夕焼けの空を眺め、流れる雲の姿にその面影を重ねて、多感な心の動きをそのまま詩によんでいった。

生来の大きな身体つきと、優れた学業成績で、勝五郎は野沢中学校(現野沢北高校)に進む。当時は交通の便もなく寄宿舎に入ったが、生徒らしからぬ行動も多く、たちまちリーダー格となっていた。

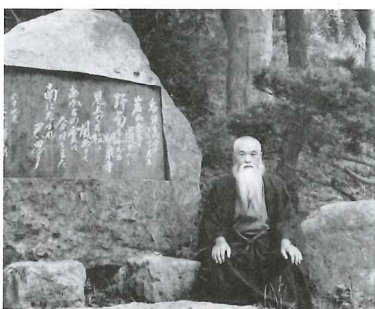
その頃の農民の暮らしは貧しく、制服も買えなかった勝五郎に、教師(舎監)の高松良は、たまたま着られた夏の制服を与え、一年中を過ごさせた。何はばかりことなく冬も堂々と夏服でいる勝五郎の才能を見抜いた高松との出会いがあつてこそ、後の田園の詩人三石勝五郎がつくられていく。高松は五年生の夏休みに長野の保科五無齋が主宰する保科塾に勝五郎をあずけ、様々な生活体験をさせる。たった一ヶ月のことではあつたが、その影響は大きく存分に詩心を動かしていった。

勝五郎はペンネームを「孤帆」としてたくさんの詩を書き、一九〇七(明治40)年、中学在学中に処女歌集『歴史・地理佐久唱歌』を自分で働いたお金で出版する。世間がどう思つかなどというところこたわることなく、まさに「我が道をゆく」勝五郎であった。

●勝五郎と妻きく

千曲川・浅間山・蓼科山など、ふるさとの自然、そこに住む人々との交流は、出会った家の柱や庭にあつた板切れなどに墨痕あざやかに書き遺されていった。

一九二三(大正12)年、勝五郎は三五歳の時、石川県金沢出身の宇野きくと結婚する。托鉢をしながら学校の便所の汲みとり奉仕などに精を出すかわら、すばらしい詩を書く勝五郎に心惹かれてのこと。若い人たちは、夫唱婦随でなくお互いをしっかりと認めあつた暮しぶり、北海道まで新婚旅行をした二人に、奇異と羨望の目を向けた。子どもには恵まれなかつたが、きくの物怖じすることなく自分の意見をきちんとのべる姿に、多くの女性たちが、女性解放の糸口を学んでいった。勝五郎の詩作と共に、きくの佐久における女性としての活動の実績は大きなものであつた。



明泉寺境内の詩碑と作者である勝五郎
『摂政宮行啓地・信濃関伽流山』より

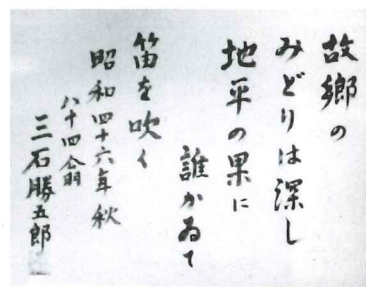
●書物を昭和天皇に献上

一九二三(大正12)年、昭和天皇が摂政宮の時、

歴史というものは学ぶものでなく肌で知るものという勝五郎の理念は、その頑強な身体で佐久を隅々まで歩き、五一の町村を詩にして残す。現在、町村合併などで名称がなくなつてしまつた所も多いが、これらの詩は昔を知る貴重な歴史的財産でもある。一九〇八年、野沢中学校を卒業し、早稲田大学予科に進む。入学の後も成績優秀、持ち前の闊達で学生生活を過ごした。卒業の時読んだ「入学当時早稲田の森にカラスが鳴いていました。カアカアでございました。…」で始まる答辞は、未だに前代未聞の答辞として語りつがれている。

●放浪と出会い

一九一四(大正3)年、白田の東信新報社に入社、すぐに「南佐久郡志」の編集にかかわり、自分の足と目で確かめまとめた文章で、大いにその力量を發揮した。やがて仕事で朝鮮半島に渡るが、思わぬ病いを得て挫折し、一九一八年に帰国する。その後東京牛込にある南北社出版部に入社し、取材活動をしな



三石勝五郎の詩、白田稲荷山公園に詩碑が建立されている

からも、数多くの詩を文芸社に寄稿する。そこでサトウハチロー、武者小路実篤、西條八十などの親交が生れた。ことに京都一燈園(奉仕団体)の創始三井村香坂(現佐久市香坂)の関伽流山明泉寺に立ち寄られた。その記録をもとに『摂政宮行啓地・信濃関伽流山』を一九七〇年に出版し、宮中に献上した。たしかに天皇陛下のお手に渡つたかどうか、その受けとり書を宮内庁からいただいたことなど有名な話である。

一九七六年、勝五郎は辞世の詩を書く。

辞世の詩(抜粋)

信は万事の基をなす
命数天にありといつも
信する国手に身をまかせ
何時果てるとも更に悔なし

百歳までも生きようとしていた勝五郎だがその意気こみは果たせず、この詩執筆の三日後の八月一九日に八八歳でこの世を去つた。

詩は「何時果てるとも更に悔なし」と結んであつた。詩の数一八〇〇余、著書『火山灰』『散華楽』など多数。(佐々木都)

○参考文献

- 三石勝五郎を語る会編・刊『三石勝五郎全詩集』二〇〇一
- 宮澤康造編『三石勝五郎一人と作品』
- 三石勝五郎を語る会 二〇〇四
- 三石勝五郎『摂政宮行啓地・信濃関伽流山』

株式会社美術年鑑社 一九七〇